

熟年俳句誌

12 2013年  
月 号

かたね

ふ



# 黒羽集

(二十四)

佐藤喜仙

朝秋の雲間にもるる光かな

夕萱や木道のはて雲一塊

ラジオ体操うしろにそれば鱗雲

しのび寄れど蜻蛉の日を出し抜けず

遠回りして荒庭の虫時雨



末杣や古稀の声聞くあたりから

玄関で飼う鈴虫やねやの闇

秋晴れや靴紐白き中学生

鎌をもう天にかざせぬいぼむしり

墓洗ふ同じ日付の三人の名

静かなれど二百十日の胸騒ぎ

諸花より人目あつむる葉鶏頭

# かさね集

白選句集



「佃辺り」

松本周二

萩まつり古刹で薯をふるまはれ

秋麗のぼんぼん船や隅田川

水底に動かざ鯨動く鯨

このあたり佃の渡し草紅葉

地藏尊寂寞とあり蔓珠沙華

鶴首といふ蛇口より秋の水

「蔦紅葉」

古川千鶴

秋蝶の風にもつるる常夜燈

洋館を鎖すよるひ戸蔦紅葉

椎の実やわらべ見守る尊徳像

天地を隔て木犀香を放つ

翁道生生流転の鱗雲

彼岸花遠流の島の行在所

## 「秋夕焼」

川井素山

秋夕焼消えて漁火沖に浮く

嘶家の羽織も変はる寄席の秋

継がれきし飴切るリズム秋澄みぬ

腐木切る齒車ひびく秋の園

湯の煙小芥子の里の夕紅葉

段丘の櫓田海へ落つること

## 「老いの花」

安藤虎酔

狭庭にも来し初冬の兆しかな

老いてなほ志すこと帰り花

浅漬やべつたら市の待ち遠し

世界一スカイツリーや初景色

年尾忌へつたなき句などおこがまし

Sの字に休うねりつ穴まどひ

## 「行く秋」

田島昭久

まだ鳴くか蝉一匹の秋の暮

年寄が木の実をくだく秋の昼

時折は黒雲過る後の月

身に入むやよろけし塔婆見るたびに

散歩道我を追ひ越す野分かな

コスモスは花壇で最後の花飾り

# 撫子集

## 主宰選



新涼の山の緑や安らぎぬ

山本草風

長久保郁子

雲変化緑も褪せて秋深し

四つ角のカーブミラーに酔芙蓉

ひとつぶの露青天を映しけり

浅黄色やがて黄金に稲の海

裏箔の色してすすき波立てる

秋風に命育む光見る

憂きことを全て忘るる今日の月

バス停にとしより並ぶ秋彼岸

そぞろ寒こむら返りの不意にくる

小池清司

金閣寺水面を伝ふ鹿おどし

岡野安雅

道すがら芒購ひ退院す

津軽富士林檎の香り野に溢れ

残る虫に耳傾けて一人酌む

塩田の跡地の杭に秋夕焼

竹林の葉擦れ幽し秋思かな

亭主より一言あつて零余子飯

秋場所や塩高く撒く日馬富士

鹿おどし甲と響きて静まれり

寒露過ぎスカイツリーの影延びて

水澄むや都会の川に鯉の群れ

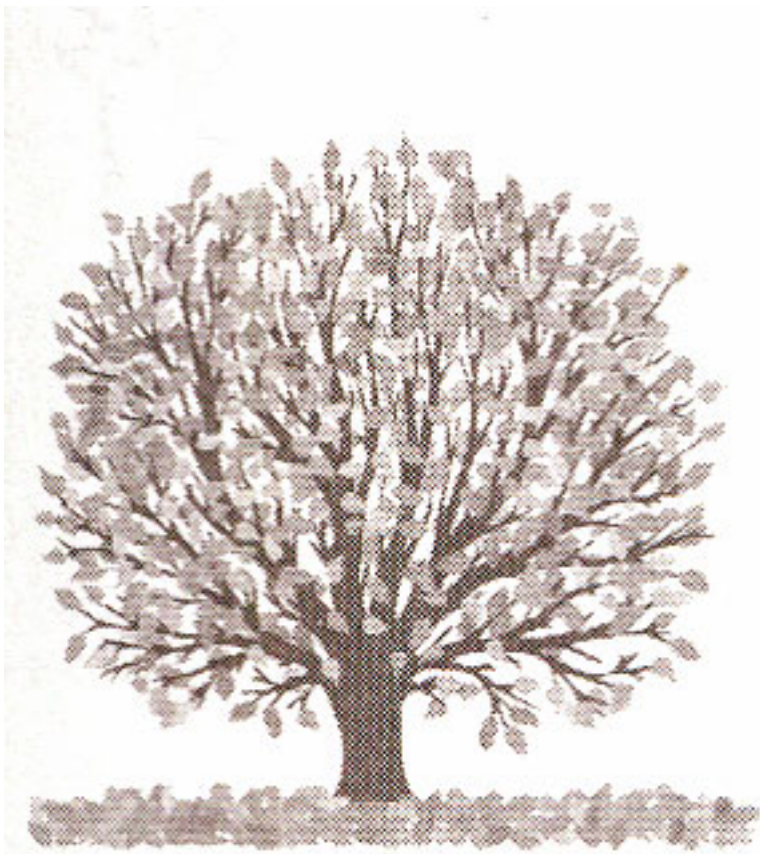
青木英林

薪割りて納屋に積み上げ冬支度

柿を挽ぐ色濃きものはまだ僅か

大風に銀杏散り降る並木道

山里の香りの強き走り蕎麦



# 那須野集

## 主宰選



蜻蛉の飛ぶ形して止まりけり 池内とほる

実むらさき謡洩れくる社かな

小柳千美子

大伽藍鐘の音重し秋の暮

秋夕焼カリヨンの音流れ来る

つややかに蕊反らしけり曼珠沙華

木の実降る里のお堂の破れ庇

木犀の香に振りむくや夕間暮

赤い羽根背伸びせし子に膝折りて

暮るるほど万燈寄する日蓮忌

雑踏に少年の指す秋の虹

秋日和釣り糸絡む舟だまり

田中清秀

雀飛びたち式部の実ゆれ残り

森岡陽子

写生する人それぞれの薄もみぢ

初もみぢ吉の御くじを結び付け

山間に法螺の音響く秋の空

ハイカーの見え隠れする芒原

秋灯下日記書きつつ焼き団子

小窓にはいづこからとも木犀の香

耳鳴りを疑ふほどに蚯蚓鳴く

橋本修平

つやつやの若者の肌秋の虹

柳田皓一

嫌がれば二匹もたかる放屍虫

左のみ半分立てる秋の虹

眺めつつ古歌口遊むけふの月

秋の虹妻に見せたしみな仰ぐ

たまさかの蜻蛉に見入る街の中

きわだちて彩あざやかや秋の虹

遅かりし目黒の秋刀魚匂ひのみ

老人の思ひ出となり秋の虹

秋雨に傘なく濡るる夜道かな

丸山酔酔子

銀色の芒の穂揺る城の跡

後藤克彦

ログハウス屋根を転がるくぬぎの実

朝寒や路行く人の咳多し

空高しどんぐりコロコロ屋根叩く

水澄むや一塊の雲流れゆく

雨上がり穂が地に垂るる白すすき

向日葵の茎まだ残り秋深し

花すすき風に吹かれて茜雲

合戦の幟のごとく芒揺る

古庭の萩のトンネル風抜けり

和田勝信

秋風や姉思ひつゝ骨拾ふ

長島青山

秋涼し水琴窟に耳を当つ

いくたびか病を超えて己が秋

萩叢の中を摺り抜け小花落つ

都にて古里に咲く萩思ふ

庭園の秋の七草指を折り

鋤焼や三十年の無沙汰埋め

狛犬の顔笑ひしか秋祭

宿を出て秋草抜けて太平洋

煌煌と照る満月や土手の怪

吉田博行

水澄むや湖面に写る逆さ富士

水澄みて白雲映す梓川

雨にぬれ紫沓ゆる桔梗かな

母と子の笑顔が踊る運動会



—— 注意したい季語 ——

冬の季語②

師走（極月・臧月・春待月）

陰曆十二月の異称であるが、今の陽曆でも同じく十二月に使われる。他の月の陰曆と陽曆の関係はどうかと言うと、陰曆一月の異名睦月は陽曆二月とほぼ同意である。かくして陰曆十一月の霜月は陽曆十二月に当る。師走も十二月とされているのでこの月は変則で陰曆の呼称霜月と師走の両方が用いられる。従がつて陽曆一月に陰曆の呼称はない。例句から概括すると十二月と霜月は中冬の季候、景を、師走は一年の終りのせわしさや騒々しさを言うのに用いられることが多いようである。

例句

市に入てしばし心を師走哉

素堂

石段の下に師走の衝あり

川端茅舎

花と本買ひしばかりや師走市

中村苑子

文責佐藤喜仙

# 撫子集・那須野集鑑賞十月号より

客員 村上克哉

## 撫子集

### 一本の道の記憶に青大将

長久保郁子

日本国内にはマムシ、ハブ、ヒメハブ以外は無毒の蛇ばかりが生息し、古くから伝説や民話にも登場して生活の中に密着している。「くちなわ」「ながむし」と呼ばれ傍題にもなっている。良く見掛けるのが青大将で家の中に入り込むこともあり気味悪がられるが、ねずみを捕り有益でもある。田舎の一本道の幅一杯にくねって渡っていった青大将、体長！〜2メートル暗褐緑色の背に〜4条の縦縞。強烈な忘れられない記憶、幼い頃の思い出か。

### 秋茄子嫁の手に為る一夜漬

小池清司

「秋茄子は嫁に食わすな」という諺があるように、

秋茄子は小ぶりではあるが身がひきしまった格別の風味があつて美味しい。お嫁さんが一晩だけ漬けた漬物は紫紺を極め一層鮮やかで如何にも美味しそうだ。9月下旬に種蒔きをして秋用に育て、小さいうちに収穫した実はしまってみずみずしく一夜漬に最適と聞く。

### 蓮咲いて鯉の跳躍城下町

山本草風

仏陀の誕生を告げて咲いたとされ、古事記や万葉集にも詠まれていた蓮は日本にも古くから伝わり、水田や池沼などで栽培されるものが多い。7、8月頃白、淡紅の花が開き、芳香を放つ、実の形が蜂の巣に似ていることから「蓮巢」と呼ばれる。古城は何処だろう、吉川の居城岩国城大手の橋にあたる錦帯橋、天守閣が山上に従耳える城下町岩国や津和野、萩などいろいろ想像される。黄昏時お濠に蓮が咲いている辺りで鯉の飛び跳ねる音がした。「鯉鮒のこの世池や蓮の花」許六、「鯉飛びてあだに蓮ちる夕かな」二柳の句を思い出す。(以下略)

# 伝言板

## 1 第二十四回本部句会(原則第一金曜日)

①日時 2013年12月13日(金)

14:00~17:00

②場所 目黒区「下目黒住区センター」

3階会議室

③投句 当季雑詠 5句

④会費 1000円

## 2 第二十五回本部句会

①日時 2014年1月10日(金)

14:00~17:00

その他事項は第二十四回に同じ

## 3 第二十四回吟行(注・第三火曜日)

日時 2013年12月17日(火)

注意 第三火曜日に変更

場所 新宿御苑

交通 JR新宿駅より徒歩10分

集合 新宿御苑インホメーション

センター内 11時

句会場 四谷区民センター

昼食

11階会議室  
各自持参。  
但し句会場ビル内9階にモ  
スバガーがあります。

出句数

嘱目3句

費用

交通費・昼食代各自負担。

申込

12月15日まで喜仙に

(FAX又はTEL)

## 4 第二十五回吟行(原則第四火曜日)

日時 2014年1月28日(火)

場所 六義園

交通

JR・営団南北線駒込駅よ  
り徒歩7分、都営三田線千  
石駅より徒歩十五分

集合

六義園正門前 11時

句会場

園内心泉亭つつじの間

昼食

未定

出句数

嘱目3句

費用

交通費・昼食代各自負担。

会場費均等割り

詳細は次号にて。

## 5 「かさね」友の会の皆さん

投句をされる時、裏面に「友の会の声」欄がございますので、句評、近況報告、ご意見などご自由にお寄せください。

なお友の会の皆さんは特別作品(十句)、随筆、その他論文等をいつでも投稿することができます。お待ちいたしております。

## 会員募集

何時からでも「かさねの友」になれます。

年会費 12000円(前納)

ただし年次途中入会者は入会申し出の翌月より12月まで月割りで納付

見本誌 400円(切手可)

見本誌請求先

15210033

東京都目黒区大岡山2-17-5

かさね俳句会 佐藤喜仙

# 「かさね」俳句の基本

## I 前提

- 一、俳句は世界最短の「詩」である。
- 二、有季・定型・文語体を旨とする。

## ① 「詩」とは

水原秋櫻子が俳誌「馬酔木」の昭和六年（一九三一年）十月号に載せた「自然の真と芸術上の真」より抜粋

「ただ自然の真だけを追求したところで詩人たる資格はない。心を養い、主観を通して見たものこそ文芸上の真で、これを尊ぶ人が詩人である」

## ② 有季の原則

### 原則①

「季語とは累々と先達が磨いてきた季節を表す言語群であり、歳時記により集大成されている」

### 原則②

「季語が一句の中で使われ、その句の季節を明確に表出する時、その季語を「表季語」と称する」

### 原則③

「一年を通して存在する現象、あるいは事物が季を定められている語彙の場合、その定められた以外の季節においてはその語彙は季語とは見做さない」

### 原則④

「季重なりとは同季に属する季語を一句の中で二語以上重ねて使用する場合をいう」

### 原則⑤

「例えば絵・版画・掛け軸・屏風・襖絵等に描かれた、通常季語と見做される花鳥等は、季感がないので季語とはみなさない。同様比喩に使われている通常は季語である語群もやはり季感が無きがゆえに、季語とはみなさない」

## ③

### 文語体について

俳句は韻文であることを守るため文語を使用し、用言においては歴史的仮名遣いを必ず使用することとする。

## II

### 俳句の約束事

一、切れ字（十八字）を使い俳句にメリハリをつける。

現在切れ字とされている文字は、や、かな、けり、もがな、し、ぞ、か、よ、せ、れ、つ、ぬ、へ、す、いかに、じ、け、けん。

二、表現

主観を直接表現せず、具象表現を使うことにより、自分がその一句の中で言いたい主観を暗示の形で言い表す。

三、地名・固有名詞

地名・固有名詞は一句の中にあつて季語に次ぐ重要な働きをするが、一句の中で使用する時は少なくとも大方の俳人が知っているであろう地名・固有名詞にとどめる。

四、三段切

形は三段切でも言わんとする内容が繋がって居れば良しとする。

例 完全な三段切 奈良七重七堂伽藍八重桜 芭蕉

三段切でも可 初蝶来何色と問ふ黄と答ふ 虚子

五、前書・ルビ

前書は慶弔の句にのみゆるされる。

ルビは誌中では使用しない。

## III

### 俳句の作り方……山口誓子

私の俳句の作り方を、図式で現せば、至極簡単である。感動が先立たねばならぬ。事物と出会って思わず「ああ」と叫ぶその叫びから、俳句は生まれるのである。